

2018/09/04 第70回日本教育社会学会大会 at 佛教大学

いじめが起こりやすい要因 —子どもの社会経済的地位と 学校環境—

眞田 英毅 (teruki.sanada.s8@dc.tohoku.ac.jp)

東北大学大学院 文学研究科 人間科学専攻
行動科学専攻分野 修士課程2年

Outline of this talk

1. Introduction

2. 先行研究

3. 理論と仮説

4. データと手法

5. 結果

6. 考察

1. Introduction

- いじめは1970年代以降，社会問題化
- いまなお，いじめにおける事件が新聞記事を賑わせている

広島・中3女子生徒が転落死 複数からいじめ、暴力

第三者委調査

広島市佐伯区の市立五日市観音中3年の女子生徒が昨年7月に死亡し、後にいじめを受けていたことが分り、有識者をつくる第三者委員会が5日、複数の同級生から「死ぬ」と言われ、傘でたたかれる暴力も受けていたとの調査結果を発表した。今後、いじめと死亡の因果関係を調べる。

第三者委や学校によると、学校は女子生徒の親からいじめの相談を何度も受けていた。だが市教育委員会に一度も報告せず、本来設けられるはずのいじめ対策会議は開かれなかった。

女子生徒は、1年時に数人から「きもい」と悪口を言われていたのが、3年になると十数人から容姿についての悪口や「死ぬ」などの暴言を吐かれるようになり、いじめが広がっていった。2年時に消しゴム片を投げられたり、3年時には傘で体を1回たたかれたりする暴力もあった。いじめは小学校の低学年から続いていたという。

市教委によると、女子生徒の死亡直後に教員への聞き取りで、悪口など7件を確認。いじめを苦に自殺した可能性があり、いじめ防止対策推進法が規定する「重大事態」に当たるとして、第三者委に調査を委託。

生徒らへのアンケートや聞き取りをしていた。

調査結果を受け、記者会見した大下茂校長は「いじめに対する認識が甘かった」と謝罪。市教委の山崎哲男生徒指導課長は「いじめを防ぐことができず申し訳ない」と頭を下げた。

第三者委は今後、学校の対応の是非についても調べると。

女子生徒は昨年7月24日朝、校舎近くの駐車場で転落死しているのが見つかった。女子生徒の部屋には、遺書のような手紙が残されていた。遺族は、弁護士を通じて「いじめについて何度も学校に伝えたのに、どうして止められなかったのだろうか」という思いがある」とのコメントを出した。

仙台・中2男子が自殺

市教委など
きょう説明
いじめ原因か

可能性も否定できないとい
者会見を開き、詳しい事
実関係の一部の保護者が
「いじめがあった」との
学校は28日、全校集会を
開いて他の生徒らに男子
生徒が自殺したことを報告
したほか、5月1日夜に
学校で保護者説明会を開
く。

仙台市内の中学校では2
014年9月、泉区の館中
1年の男子生徒11歳時12
IIがいじめを苦に自殺。同
区の南山中中でも16年2
月の全男子生徒11歳時
Iが自殺し、市教委の
第三者委員会が今年3月、
「いじめによる精神的苦痛
が自殺の一因」とする報告
をまとめた。

仙台市立全中の男子生
徒が28日に自殺したこと
が28日、関係者の話で分か
った。現時点で自殺の理由
は不明だが、いじめが原因の
指摘が出ている。

市教委で学校は28日に記

出典

河北新報

右：18/02/26

左：17/07/29

1. Introduction

- ここ数年のいじめの認知件数は横ばい(U字)

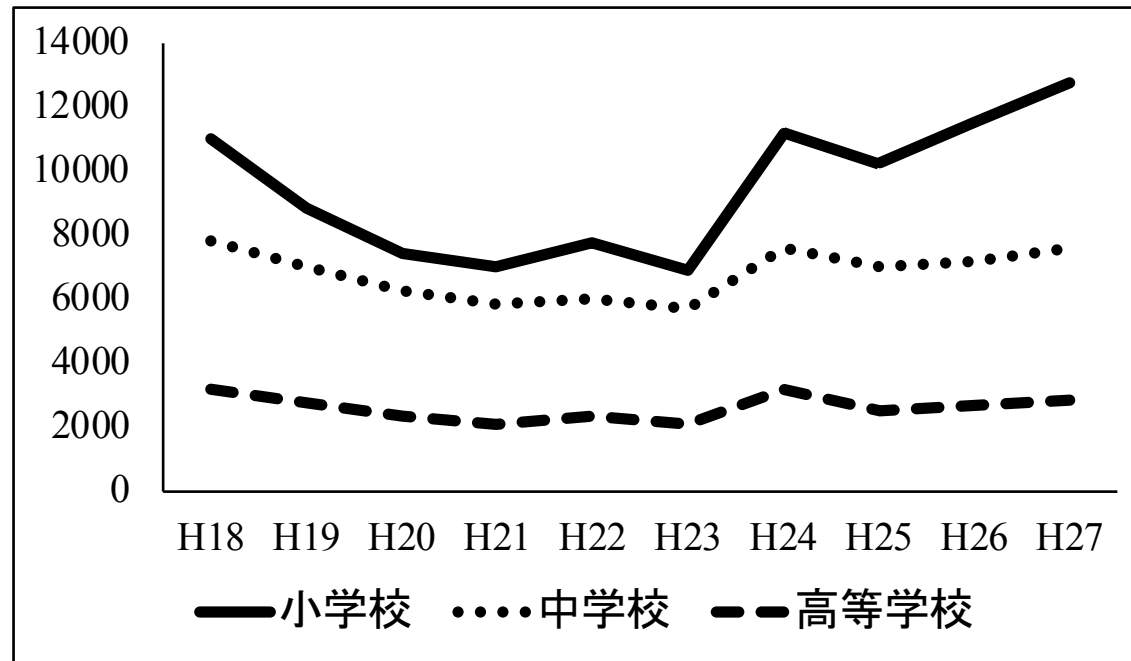


図1
いじめの認知件数¹⁾
(出典：文部科学省)

- 様々な調査や予防・介入策が行われている
(Morita 1996; Morita et al. 1999など)のに対し、
なぜいじめは減らないのだろうか。

Outline of this talk

1. Introduction

2. 先行研究

3. 理論と仮説

4. データと手法

5. 結果

6. 考察

2. 先行研究

集団特性

- ・ クラス内でのいじめの規定要因を調査
e.g. 協力的・親和的關係(高木 1986)
生徒の結束力(大西 2007)
傍観者数(森田 2010)
規範意識(水田・岡田・尾島 2016)
- ・ 調査は生徒が対象
 - 文部科学省(1994)も指摘する**教師の認識不足や多忙さといった要因は考慮されず**

2. 先行研究

個人特性

- いじめが生じる主な要因
いじめの多くは加害者の嫉妬や不満などから生じる(土居・渡部 2008; 金綱 2015; 正高 2007; 阪井 1989)
→個人の家庭背景などもいじめられる要因になりうることも十分考えられる
- いじめられやすさとSESに関する研究は多いが、結果は一致していない(Tippett & Wolke 2014)
- その多くはSESをモデルに投入し効果を検証
→周りの状況と比べた、相対的なSESに関しては考慮されていない

2. 先行研究

リサーチ・クエスチョン

日本では、①どのような環境で、②社会的にみてどのような子どもがいじめられているのか。

着眼点

1. **教師側の観点**によるいじめの原因（認識不足・交流が不十分）に着目して検討
2. いじめられる個人の要因を性格ではなく、**子どものもつ社会経済的地位**に着目して検討

→クラスをこえたいじめの被害者像を明らかに²⁾

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究
- 3. 理論と仮説**
4. データと手法
5. 結果
6. 考察

3. 理論と仮説

社会的比較理論 (Festinger 1954)

- ・ 自分の能力や評価をするために他者と比較

上位比較

- ・ 他者の方が優れていれば嫉妬を感じ、否定的行動を取りやすい (Anderson et al. 1995; 澤田・新井 2002)

→ 嫉妬されるような家庭背景をもつ子どもはいじめられやすい。

3. 理論と仮説

社会的比較理論 (Festinger 1954)

下位比較

e.g. 勉強が苦手な生徒が同級生から見下され、
いじめられやすい (須藤 2013)

→ 見下されるような家庭背景をもつ子どもは
いじめられやすい。

⇒ 仮説1： 社会経済的地位の高い子どもや低い
子どもはいじめられやすい (平均的な
子どもはいじめられにくい)

3. 理論と仮説

合理的選択理論

- ・ 監視が強い状況下では、自分の行為を社会的に好ましいものにする(コスト > 利益)
- 監視が弱まれば罰される可能性が少ないため逸脱行為を取りやすくなる(宝月 2001)
- ⇒ 仮説2：教員の監視が弱まる状況であれば、いじめが起こりやすい

3. 理論と仮説

合理的選択理論

e.g. 学級規模が大きくなれば、望ましい指導を行いにくい (Blatchford 2012; 戸田・島田 2009など)
習熟度別クラスでは、指導効率があがり、内容を焦点化しやすい (大谷ら 2014など)

仮説2-1：学級規模や生徒比率が大きくなれば、監視が弱まり、いじめは起こりやすい

仮説2-2：習熟度別クラスを実施している学校では、生徒一人一人に目を向けやすく、いじめが起こりにくい

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究
3. 理論と仮説
- 4. データと手法**
5. 結果
6. 考察

4. データと手法

データ

PISA2015

- OECDが3年ごとに行う学習到達度調査
(第6サイクル)
- 72の国や地域の15歳の子ども(高校生)を対象
- 科学的リテラシー・読解力などを調査
- 2015年はいじめに関する調査項目が初導入
- 今回は、日本のサンプルに限定

4. データと手法

手法

マルチレベル分析

- nestedデータを分析するのに適した手法
集団レベル：学校(クラス)
- 変数はMatsuoka(2013)を，モデルは永吉(2016)を参考に作成
- 男女でいじめの内容などが違うことを踏まえ，**男女別**に分析を行う
- サンプルサイズは男性2761，女性2894

※分析にはR(3.5.0)，lmerパッケージを使用

4. データと手法

従属変数

- いじめられた経験 (PISA2015 問24)

「仲間外れにされた」

「からかわれた」

「脅された」

「ものを取られたり壊されたりした」

「叩かれたり押されたりした」

「意地の悪い噂を流された」

(全くない, 年に数回, 月に数回, 週に数回)

→ どれか1つでも受けていたら1,
それ以外は0の **ダミー変数**³⁾

4. データと手法

独立変数

- 成績 (PISAの指標)
- 個人SES (PISAの指標)
- 親が子どもをきにかける程度⁴⁾
- 今日朝食を食べたかどうか
- 国語の授業の**生徒数**
- **習熟度別クラスの有無**
- 学校の**教員生徒比率**
- **学校SES** (学校ごとの平均)
- 学校所在地の**都市**の大きさ
- 個人SES-学校SESの**差の2乗**

個人レベル

学校レベル

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究
3. 理論と仮説
4. データと手法
- 5. 結果**
6. 考察

5. 結果

基礎分析

表1 いじめ被害と個人SESの相関分析

	仲間はずれ	からかい	脅し	破壊	暴力	意地の悪い噂	単純加算
個人SES (男性)	-0.02	0.03	-0.01	0.01	0.02	0.04†	0.04†
個人SES (女性)	0.03	0.02	0.02	0.02	0.03†	0.04*	0.05*

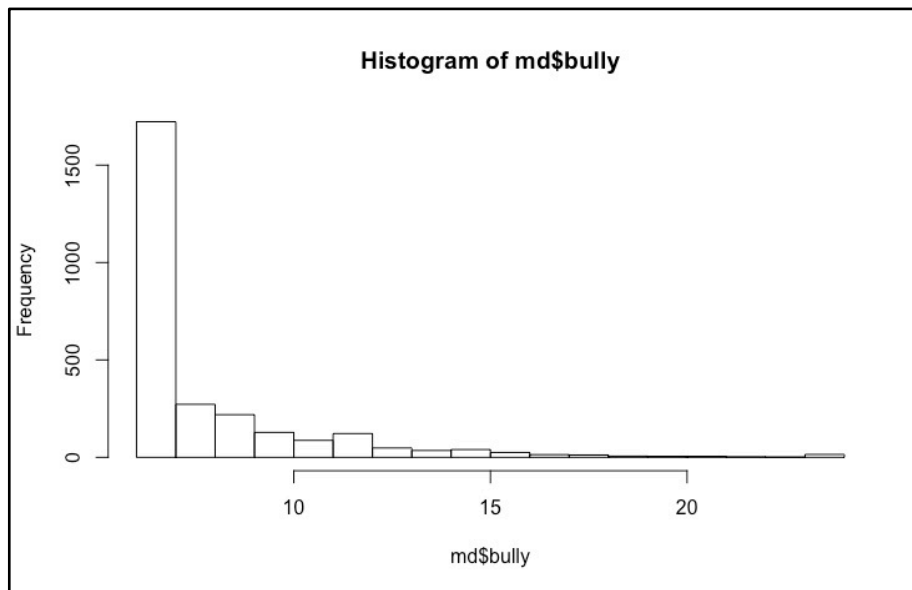


図2 いじめ被害(男性)

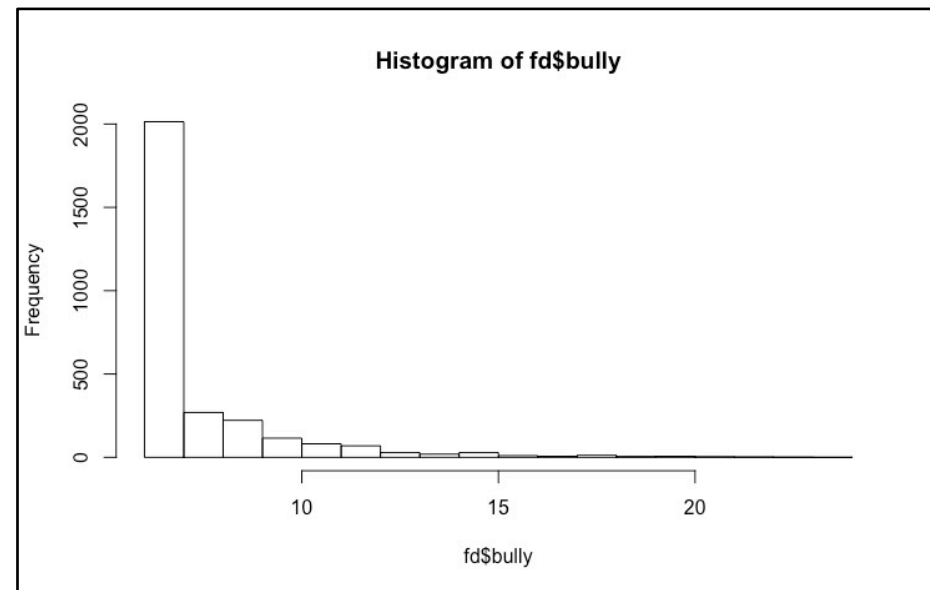


図3 いじめ被害(女性)

5. 結果

基礎分析

表2 いじめ被害と性別のクロス集計表
(表示は度数, 括弧内は%)

	いじめ経験あり	いじめ経験なし	計
男性	1330 (48.17)	1431 (51.83)	2761 (100.00)
女性	1268 (43.78)	1626 (56.22)	2894 (100.00)
計	2598 (45.93)	3057 (54.07)	5655 (100.00)

$\chi^2 = 10.799, d.f. = 1, p < 0.001, Cramer V = 0.044$

5. 結果

表3 いじめられやすさに関するマルチレベル分析

	男性		女性	
	B	S.E.	B	S.E.
固定効果				
係数	0.636 ***	0.123	0.364 **	0.123
個人の社会経済的地位 (SES)	0.010 *	0.005	0.012 **	0.005
成績	0.082 ***	0.012	0.016	0.013
親の教育関心	-0.023 ***	0.004	-0.019 ***	0.004
当日朝食を食べたか	-0.007	0.036	-0.026	0.038
集団レベル1 (男性：188,女性189)				
習熟度別クラスダミー	0.022	0.023	-0.007	0.021
国語の授業の生徒数	-0.008	0.024	-0.013	0.022
学校ごとの社会経済的地位(SES)	0.021	0.017	0.049 **	0.017
教員生徒比率	-0.004	0.003	-0.001	0.002
(学校SES－個人SES)2乗	-0.001	0.002	0.002	0.003
都市サイズ	0.009	0.026	0.002	0.024

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, † $p < 0.1$ 最尤法推定

5. 結果

- **個人SESは男女ともに正の有意な効果**
→SESが高い子どもはいじめを経験しやすい
- 親の教育関心も男女ともに有意な負の効果
→親の教育関心が低ければ，子どもはいじめにあいやすい
- 成績は男性で正の効果，学校SESは女性で負の効果
→成績が良い男子ほどいじめにあいやすい
女子は平均SESが高い学校でいじめにあいやすい

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究
3. 理論と仮説
4. データと手法
5. 結果
- 6. 考察**

6. 考察

仮説の検討

仮説1：社会経済的地位の高い子どもや低い子どもはいじめられやすい(平均的な子どもはいじめられにくい)

→ **一部支持**

個人SESの効果は男女とも見られたが、学校内で相対的にみてみるとその効果は確認できなかった

6. 考察

仮説の検討

仮説2-1：学級規模や生徒比率が大きくなれば、
監視が弱まり、いじめは起こりやすい

仮説2-2：習熟度別クラスを実施している学校
では、生徒一人一人に目を向けやすく、
いじめが起こりにくい

→ともに**不支持**

教員の負担に関してはどの変数でも効果が確認
されなかった

6. 考察

結果のまとめ

- 先行研究の指摘通り，成績などもいじめられやすさに影響を与える
- SESのような家庭背景もいじめの規定要因となりえ，クラスや学校での相対的な位置は影響を及ぼしていない
- 他方，学校環境の違いがいじめを生む要因ともなりえる

6. 考察

今後の課題

1. 親が子どもをきにかける程度
親が子どもに話を聞くほどに、子どもは学校での出来事を思い出しやすいのでは？
2. 統制変数
いじめの被害者の個人要因(性格など)をモデルに投入できない
3. 従属変数の分布の考慮
いじめられたかどうかのダミー変数
4. 国際比較
国によって効果は異なるのか(教育支出など) 27

注釈

- 1) いじめの件数の調査は平成17年まで「発生件数」だった。しかし、平成18年から正確な数を把握するため、「認知件数」を調査している。この図では平成18年以降を掲載しているため、「認知件数」のみである。なお、平成24年の急激な伸びは、平成23年に「大津いじめ自殺事件」などの多くの事件が起きたことを受けて、緊急の調査が平成24年に行われたためである。
- 2) いじめを減らすには、いじめの多様な視点からの把握が欠かせないが、そのアプローチは大きく、
 - ①加害者の要因を多くもつ子どもを加害者にしない
 - ②被害者の要因を多くもつ子どもを被害者にさせないと別れる。本研究は主に②に着目する。

注釈

- 3) 「いじめられやすさ」の指標に関しては先行研究でも多くの方法が取り上げられている(例えば単純加算, 主成分得点(須藤 2014), 因子得点(Saarento 2013), 二値(Laftman et al. 2017)など). 今回, 単純加算や因子得点を算出した際に, 従属変数の分布が左にかなり偏っていたため二値変数で分析を行った.
- 4) 「親が子どものことを気にかける程度」に関しては以下の変数の値を足したものである(PISA2015 問10).
- ・ 親は, 私が学校でしている活動に関心がある
 - ・ 親は, 私が勉強で努力していることや達成しようとしていることを応援している
 - ・ 親は, 学校で困難な状況に直面したとき助けてくれる.
 - ・ 親は, 私が自信をもてるように励ましてくれる.

引用文献①

- Andersen, P. A., Eloy, S. V., Guerrero, L. K., & Spitzberg, B H. ,1995, “Romantic Jealousy and Relational Satisfaction: A Look at the Impact of Jealousy Experience and Expression,” *Communication Reports*, 8, 77–85.
- Blatchford, P. , 2012, “Three generations of research on class-size effects,” K. R. Harris, S. Graham, & T. Urduan eds., *Individual differences and cultural and contextual factors*. Washington DC :American Psychological Association. 529–54.
- 土居健郎・渡部昇一, 2008, 『「いじめ」の構造』PHP研究所.
- Festinger, L. ,1954, “A theory of social comparison processes,” *Human Relations*,7, 117-140.
- 宝月誠, 2001, 「逸脱行為の生成に関わる諸要因:統合理論を求めて」『京都社会学年報』9: 1–18.
- 井上健治・戸田有一・中松雅利, 1986, 「いじめにおける役割」『東京大学教育学部紀要』26: 89–106.
- 金網知征, 2015, 「日英比較研究からみた日本のいじめの諸特徴」『エモーション・スタディーズ』1(1): 17–22.
- 久保田真功, 2012, 「国内におけるいじめ研究の動向と課題 —いじめに関する3つの問いに着目して—」『子ども社会研究』18: 53–66.
- , 2013, 「なぜいじめはエスカレートするのか?: いじめ加害者の利益に着目して」『教育社会学研究』92: 107–27.
- 正高信男, 2007, 『ヒトはなぜヒトをいじめるのか: いじめの起源と芽生え』講談社.
- Matsuoka Ryoji, 2013, “Tracking Effect on Tenth Grade Students’ Self-learning Hours in Japan,” 『理論と方法』28(1): 87–106.

引用文献②

- 水田明子・岡田栄作・尾島俊之, 2016, 「日本の中学生のいじめの加害経験に関連する要因: クラスレベルと個人レベルでの検討」『日本公衆衛生看護学会誌』5(2): 136–43.
- 文部科学省, 1984, 『児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題(小学校生徒指導資料3)』.
- 森田洋司・清永賢二, [1986] 1994, 『新訂版 いじめ: 教室の病い』金子書房.
- Morita Youji, 1996, Bullying as a contemporary behaviour problem in the context of increasing ‘societal privatization’ in Japan, *Prospects*, 26: 311–29.
- Morita, Youji, Soeda, H., Soeda, K., & Taki, M. ,1999, “Japan,” P. K. Smith, Y. Morita, J. Junger Tas, Dan. Olweus, R. Catalano, & P. Slee eds., *The nature of school bullying: A cross-national perspective*, London & New York: Routledge, 309–23.
- 森田洋司, 2010, 『いじめとは何か—教室の問題, 社会の問題』中央公論新社.
- Olweus, D.,1993, *Bullying at school: What we know and what we can do*, Oxford:Blackwell.
- 大谷麻美・横山仁視・ブラッドフォード ワッツ キム, 2014, 「プレースメントテストによる習熟度別クラス編成に関する報告書: 全学共通言語コミュニケーション科目の英語における事例」『人文論叢』62: 27–50.
- 永吉希久子, 2016, 『行動科学の統計学—社会調査のデータ分析』共立出版.
- 大西彩子, 2007, 「中学生のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果」『カウンセリング研究』40(3): 1–9.
- Pellegrini, A. D.,Bartini, M. & Brooks, F. ,1999, "School bullies, victims, and aggressive victims: factors relating to group affiliation and victimization in early adolescence," *Japanese Journal of Educational Psychology*, 91: 216–24.

引用文献③

- Saarento, S., Karna, A., Hodges, E. V. E. & Salmivalli, C., 2013, "Student-, classroom-, and school level risk factors for victimization," *Journal of School Psychology*, 51: 421–34.
- 阪井俊郎, 1989, 『いじめと恨み心』家族教育社.
- 澤田匡人・新井邦二郎, 2002, 「妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響」『教育心理学研究』50(2): 246–56.
- 須藤康介, 2014, 「いじめと学カ—TIMSS2011中学生データの計量分析から」『江戸川学園大学紀要』24: 121–9.
- 杉原一昭・宮田敬・桜井茂男, 1986, 「『いじめっ子』と『いじめられっ子』の社会的地位とパーソナリティ特性の比較」『筑波大学心理学研究』8: 63–71.
- 高木修, 1986, 「いじめを規定する学級集団の特徴」『関西大学社会学部紀要』18(1): 1–29.
- 詫摩武俊, 1984, 『こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる』山手書房.
- 戸田まり・島田諭, 2008, 「学級規模が小学校低学年担任の意識と行動に及ぼす影響」『北海道教育大学紀要 教育科学編』59: 275–86.
- Tippett, N., & Wolke, D., 2014, "Socioeconomic status and bullying: A meta-analysis," *American Journal of Public Health*, 104(6): 48–59.

記述統計量(従属変数)

表1 従属変数の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均	標準偏差
男性					
仲間はずれにされた	2761	1.00	4.00	1.19	0.57
からかわれた	2761	1.00	4.00	1.68	1.02
脅された	2761	1.00	4.00	1.12	0.47
ものを取られたり壊されたりした	2761	1.00	4.00	1.21	0.53
叩かれたり押されたりした	2761	1.00	4.00	1.43	0.85
意地の悪い噂を流された	2761	1.00	4.00	1.28	0.65
女性					
仲間はずれにされた	2894	1.00	4.00	1.24	0.59
からかわれた	2894	1.00	4.00	1.50	0.88
脅された	2894	1.00	4.00	1.06	0.32
ものを取られたり壊されたりした	2894	1.00	4.00	1.13	0.41
叩かれたり押されたりした	2894	1.00	4.00	1.19	0.58
意地の悪い噂を流された	2894	1.00	4.00	1.30	0.62

付録

記述統計量(独立変数：連続)

表2 連続変数の記述統計量

		度数	最小値	最大値	平均	標準偏差
男性	成績(標準化)	2761	-2.90	2.79	0.14	0.98
	社会経済的地位(個人)	2761	2.30	10.62	6.47	1.91
	親の教育関心	2761	4.00	16.00	12.49	2.47
	社会経済的地位(学校)	2761	4.53	8.24	6.46	0.89
	国語の授業の生徒数	2761	15.00	50.00	36.13	5.41
	教員生徒比率	2761	1.00	19.86	11.77	3.88
	個人SES-学校SESの2乗	2761	0.00	29.92	3.64	3.78
女性	成績(標準化)	2894	-3.20	2.64	0.05	0.93
	社会経済的地位(個人)	2894	2.24	10.67	6.43	2.07
	親の教育関心	2894	4.00	16.00	13.13	2.35
	社会経済的地位(学校)	2894	4.53	8.29	6.43	0.82
	国語の授業の生徒数	2894	15.00	50.00	36.25	5.35
	教員生徒比率	2894	1.00	19.86	11.32	4.49
	個人SES-学校SESの2乗	2894	0.00	28.07	3.60	3.61

付録

記述統計量(独立変数：カテゴリー)

表3 カテゴリー変数の記述統計量

	男性		女性	
	度数	%	度数	%
今朝朝食を食べましたか (はい)	2550	92.36	2707	93.54
今朝朝食を食べましたか (いいえ)	211	7.64	187	6.46
習熟度別クラスを実施している	1294	46.87	1531	52.90
習熟度別クラスを実施していない	1467	53.13	1363	47.10
学校所在地 (10万人未満の都市)	1950	70.63	2113	73.01
学校所在地 (10万人以上の都市)	811	29.37	781	26.99
計	2761	100.00	2894	100.00